

平成 26 年度「大学入門ゼミ」実施報告

佐藤慶太 (大学教育開発センター准教授)
小方朋子 (教育学部准教授)
三宅岳史 (教育学部准教授)
井上正也 (法学部准教授)
藤原敦志 (経済学部准教授)
宮下信泉 (医学部准教授)
高橋悟 (工学部准教授)
末吉紀行 (農学部准教授)

1. はじめに

本稿は、平成 26 年度「大学入門ゼミ」の実施状況についての報告である。「大学入門ゼミ」準備のプロセス、および過去 3 年の実施状況については、佐藤 (2011)、佐藤ほか (2012、2013、2014) を参照されたい。

まず本年度の大学教育開発センター (以下、大教センター) の取り組み内容を、昨年度からの変更点を含めて確認する (第 2 節)。次いで、各学部の実施状況報告を示す (第 3 節)。最後に、実施状況報告を踏まえて大学入門ゼミ実施部会でなされた議論の内容をまとめる (第 4 節)。第 3 節の各学部実施状況報告を除く箇所本文責は、佐藤慶太が負う。

2. 今年度の大教センターの取り組み

「大学入門ゼミ」に関する取組は、主に各学部の実施担当者の代表と大教センター主担当の教員から構成される「大学入門ゼミ実施部会」(以下、実施部会)を母体としてなされる。今年度の実施部会委員は、佐藤慶太 (大学教育開発センター：実施部会長)、葛城浩一 (大学教育開発センター)、小方朋子 (教育学部学校教育教員養成課程)、三宅岳史 (教育学部人間発達環境課程)、井上正也 (法学部)、藤原敦志 (経済学部)、宮下信泉 (医学部)、高橋悟 (工学部)、末吉紀行 (農学部) の 9 名である。大教センターが平成 26 年度の「大学入門ゼミ」に関して行ったのは、次の 6 つの取組で、①、⑥以外の企画を実施部会が担っている。

- ①「大学入門ゼミ」担当者向け F D (平成 26 年 3 月：計 6 回)
- ②授業公開 (大杉奉代講師 (経済学部)、野田茂教授 (工学部))
- ③受講生対象のアンケート (以下、受講生アンケート)
- ④担当者教員対象のアンケート (以下、教員アンケート)
- ⑤実施状況の報告、検討
- ⑥実践例紹介 F D (平成 26 年 12 月：全学 F D 分科会)

受講生アンケートでは、昨年度まで行っていた、全学共通コンテンツの必要性の理解、全学共通コンテンツの習得度についての自己判定、についての質問を削除し、全学共通コンテンツを学んでよかった点（自由記述）、改善すべき点（自由記述）のみを質問項目とした。全学共通コンテンツの必要性の理解や自己判定については、過去3年の調査で安定した傾向を確認できるようになったため、継続する必要はないという判断が実施部会でなされた。一方で、全学共通コンテンツを学んでよかった点、改善すべき点については、担当教員へのフィードバックを主目的として継続されることとなった。このアンケート調査は「大学入門ゼミ」の授業時間内、7月1日から授業終了時までの間に行われた。

教員アンケートでは、全学共通コンテンツを指導して考えたこと・感じたこと、全学共通コンテンツを指導するにあたって凝らした工夫、『大学入門ゼミハンドブック』についての意見、「大学入門ゼミ」の教育効果についての意見、を自由記述式で求めている。次節で示す各学部の実施報告書は、以上の受講生アンケート、教員アンケートを踏まえて作成されている。なお、今年度から、担当者が集まって反省会を行っている学部では、教員アンケートを実施せず、反省会の議論を踏まえて報告書を作成する、ということとなった。

⑥では、授業公開をしていただいた大杉講師、実施部会の委員である高橋准教授にご自身の「大学入門ゼミ」の実践例を紹介していただいた。FDの詳細については「全学共通教育の平成27年度実施に向けた研修会（FD）報告」（本誌61－67頁）を参照されたい。

3. 各学部の実施状況

本節では、実施部会の委員による各学部の実施報告を順に示す（以下の実施報告では、項目の立て方等で統一されていないところがあるが、とくに修正しないままにしている）。各学部の受講者数、担当教員数およびクラス数は表1のとおりである。

表1 各学部の受講者数と担当教員数

学 部	受講者数	担当教員数とクラス数
教育（学校教育教員養成課程）	138	12（6クラス）
教育（人間発達環境課程）	71	6（3クラス）※
法	160	8（8クラス）
経済	285	15（15クラス）
医	169	7（6クラス）
工	268	13（13クラス）
農	156	6（6クラス）

※教育学部人間発達環境課程は、このほか昨年度授業を担当した教員を全体のコーディネーターとして配置している。

3-1. 教育学部学校教育教員養成課程

（1）実施の概要

昨年度とほぼ同じ形式で行った。全学共通コンテンツについては138名を2クラスに分けて実施し

た。

表 2 教育学部学校教員養成課程「大学入門ゼミ」のスケジュール

回	月・日（曜日）	内 容
1	4月14日（月）	（全体） オリエンテーション
2	4月21日（月）	情報整理の方法
3	4月28日（月）	日本語技法①
4	5月7日（水）	合宿事前指導
5	5月10日～11日	合宿 二十四の瞳出会い学習
6	5月19日（月）	日本語技法②
7	5月27日（月）	幼稚園・小学校・中学校参観事前指導
8	6月2日（月）	小学校参観
9	6月9日（月）	振り返り
10	6月16日（月）	レポートの書き方
11	6月23日（月）	プレゼンテーションの方法
12	6月30日（月）	幼稚園・中学校参観
13	7月7日（月）	振り返り
14	7月14日（火）	発表準備
15	7月28日（月）	発表 授業評価その他

（2）受講生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

結果をみると、自由記述の欄に「レポートの書き方がよかった」が多数見られ、もっと早く実施してもらいたいという希望が多かった。来年度からは早く実施したい。

（3）「二十四の瞳」との出会い学習

「二十四の瞳」を詳しく知る学生は殆どいないが、県教委の採用募集ポスターやパンフなどに幅広く活用されており、いまだに包含する価値は大きい。この授業の一部に組み込んである合宿やその事前事後指導を通じて、未来の教師を目指す1年次生に教師への憧れや教育への情熱を「二十四の瞳」を活用して醸成したいと考えた。この活動自体が地域に根ざした取り組みであるとともに、地域に誇りをもち活動する学生を育成することにもつながると思われる。

また全学共通コンテンツの技術的なものをどういった内容（素材）を使って教えていくのか、学部（課程）の1年生にふさわしい内容はどのようなものか、について担当者間で引き続き検討していきたい。

3-2. 教育学部人間発達環境課程

（1）実施の概要

課題探究型の授業の実践（最後にグループ発表）と、その作業が進行するにつれて各アカデミックスキルを教えて実践するという形式は例年通りであった。

今年の新たな試みとして大きく変えたのは、課題探究で問題を立てることにつまずくことが例年見られたため、今年度は担任がいくつかの論点を設定し、それをグループが選択して展開させるという形をとった。テーマについては以下のとおりである。

1. 脱原発の是非、2. 人口減少社会の是非、3. 貿易自由化と国内産業育成（TPPの是非）、4. いじめの問題、5. 不登校の問題、6. ヘイトスピーチと表現の自由、7. 臓器移植の是非、8. エ

セ科学と科学の線引き問題、9. これからの図書館の在り方（民営化を進めるべきかなど）

この結果、問題を立てる時点で方向性が分からなくなるグループはなくなり、例年よりは自分たちが何をやっているのか全く分からないという状態のグループはなくなった。この点で、この方式は一定の成果が見られたと思う。

（２）改善点等

しかし、課題のハードルを下げることで、今までは隠れていた問題が顕在化した。まず、文献が深く読み込めていないという問題が指摘された。これは主にスキル教育の量が多いので、あまり内容の方に時間をかけられなかったという理由が考えられる。

また、文献読解以前に、適切な文献を選んでおらず、いきなり難しい内容の専門書を読んで途方に暮れるといった事態も散見された。これについては、検索の仕方は教えるのだが、今の研究段階でふさわしい文献を選ぶということをあまり教えなかったため、検索サイトに出てきた本をよく考えずに選んでしまうという理由が考えられる。

ただし、分野が異なれば良書を探り当てるといのは研究者でも難しい。したがって、このような課題探究型授業では、ある程度、分野ごとに基本参考文献のリストがあるといいのでは、ということになり、全学共通教育でリストを作ることを提案してはどうかということが話された。これについては、調査研究部を通して提案をし、リストの作成は現在進行中である。

それから去年と同じく、引用と出典情報の書き方については、教員の方で強調した割には学生の身についていない。これに関しては、受講生アンケートの自由記述では、本の読み方や引用の仕方などはよくわかったと肯定的な回答が見られるにもかかわらず、提出レポートを見てみるときちんとできていないというのが担任団の共通した見解であり、悩みの種となっている。おそらく、出典情報についてのスキルは理解しても、なぜ出典情報を載せないといけないのかという動機づけがうまくいっていないのではないと思われる。

また発表の時にアウトラインを作成しても、レポートを書くときにそのアウトラインを使ってレポートを書くことができていない学生もいて、文脈が変わると対応力のなさが露見する場合も見られた。これについては、最終レポートを書く前にもう一度、レポートのモデルを示しながら、引用や出典情報について、コピーへの注意喚起、そしてアウトラインを利用して書くことなど、簡単にレクチャーしたほうがよいかもしれない。

それから、最後にメールについては、今年から st-mail で学校の連絡をすることをつけて、全員最初に st-mail の設定を教えた。最初は大変であったが、一度設定を教えておくと後で連絡が取りやすくなったようである。

スキル教育に関しては、どうしても作業する前にいろいろ前もって教え込みたくなるが、そうすると身につく前にスキルが剥落するようである。一度課題探究を先行させて、作業をさせてみてから、うまくいかなければ少し補う程度に教えるといった方法を編み出せないかと思案中である。

3-3. 法学部

（１）実施の概要

本年度の大学入門ゼミについては、共通コンテンツ・ガイドラインに沿って各教員が個別に講義を

行う形を基本とした。テキストに関しても、『大学入門ゼミハンドブック』を参考に各教員がそれぞれ内容を準備して行うようにした。全クラス一斉に行ったものとしては、法学部で発生した不祥事の再発予防のために心理カウンセラーによる講演会を実施した、講演会は大学入門ゼミに全受講生参加を前提に実施し、学生全員にレポートの提出を義務づけた。なお、これについては評判が良かったため次年度以降も、同様の講演会を大学入門ゼミの時間の一部を利用して行うことを教務委員会で検討中である。また、図書館・法学部資料室見学については、施設のキャパシティの問題から各時間 2～3 クラスずつに分散してこれを行った。

(2) 受講生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

共通コンテンツを利用しているとはいえ、教員間の授業内容に違いがあり、評価についての比較が困難であるという印象を受けた。しかしながら、日本語技法については概して学生から不要であるという評判が多かった。また、受講生アンケートから判断して、共通コンテンツでの指導指示を無視して独自の教育を行う教員がいることが推測され、こうした教員と全学の教育方針の整合性をどのように図っていくかが今後の課題である。

(3) 改善すべき点等

「全学共通コンテンツ」導入については、未だ教員からの反感も根強く、法学部基礎教育の「共通化」には程遠いのが実情である。今回の教員アンケートについても提出した教員は 8 名中 5 名に留まった。また受講生アンケート自体を実施していない授業もあったように見受けられる。教員サイドからの不満としては、教育内容に干渉されるという「感情論」はさておいて、『大学入門ゼミハンドブック』への不満も散見された（テキストが理系寄りで文系には不適切、メールの書き方や日本語技法などは不要等）。全学共通の冊子ということなので各学部用にローカライズする必要があるが、法学部内部で意見を調整することは時間的にも困難である。改善案として、香川大学でのテキスト作成にこだわるよりも、完成度の高い外部テキスト（立教大学大学教育開発支援センター「Master of Writing」）を活用するのが効率的ではないかと考えている。

最後に学生サイドからの要望として、レポートの採点などきめ細やかな対応を求める声が存在した。今後法学部としてこうした要望に応じていけるよう一層の改善を図っていきたいと考えている。

3-4. 経済学部

(1) 実施の概要

今年度の経済学部の大学入門ゼミの開講数は 15 であり、昨年度の 25 から大幅に減少した。これは、経済学部で今年度から教員 1 人当たりの授業負担コマ数を一律に 2 単位減らす措置が取られたため、そのしわ寄せの一部を大学入門ゼミが受けたためである。また経済学部は 3 学科それぞれに所属する 1 年生が、その学科の教員が提供する大学入門ゼミの中から選択することになっている。これは、各学科の専門性を反映した教育を 1 年生からしたいという意図が働いているためである。以上のことから、例えば経済学科は、昨年度の開講数 11 から今年度は 5 にほぼ半減し、1 クラス当たりの受講生も平均 10 人から 20 人に倍増した。経営システム学科、地域社会システム学科も経済学科ほどではないにせよ、1 クラス当たりの受講生が 3～5 人くらい増加してやはり 1 クラス 20 人弱になっている。

これにより、1人当たりの教員の負担感は増し、また授業もグループワークの色彩を強めざるをえない結果になったと予想される。

授業の内容については、共通コンテンツを中心にしたクラス、新聞記事や英語の雑誌など読解力の養成に重点を置いたクラス、フィールドワークなど実際に学外に出て社会に触れさせることを重視したクラスの大きく三つに分けられる。またそれぞれにおいて、教員の専門分野を題材にしたクラスと一般的なテーマを題材にしたクラスに分けられる。また共通コンテンツ内でも教員によってどこに比重を置くのかでばらつきが相当程度あると推察される。

(2) 受講生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

学生の感想として目立ったのは、(1)で述べたように教員によって共通コンテンツの比重の置き方に相当程度差があるので、例えば「レポートの書き方」を詳しくやったクラスはそれについての評価が高く、逆にほとんどやらなかったクラスはその点について「もっと知りたかった」などという感想が多かった。またその他の学生が抱いた不平としては、「学生（教員）がやるだけで、教員（学生）にも同じことをして（させて）ほしかった」、「グループディスカッションなどグループ内の交流をもっと（楽しくあるいはワイワイと）したかった」などであった。また1クラス当たりの受講生が増えたことから、自分が発表の時間は授業に参加している感じがするが、それ以外の時間はただぼーっとしていると感じている学生が少なからずいた。こういう学生の中には自分が発表でないときも、もっと積極的に発言するなどして参加する姿勢を見せるべきだったと自ら反省している者もいたが、それにも限界があるだろう。経済学部では今後も1クラス当たりの受講生が減少する見込みは薄いため、学生全員が常に主体的に授業に参加している感覚を持てるようにするにはどうすればよいかを考えていく必要がある。

3-5. 医学部

(1) 実施の概要

・クラス分け、担当者、アンケートの実施状況

全学生数169名を学生に対する希望調査により6クラスに分け、教員7名で前期に行った。教員アンケートは3名、学生用アンケートは96名の回答であった。

・共通コンテンツの実施状況

医学部に関しては、各クラスの担当教員が全15コマの講義時間内に実施した。授業の形式は以下の二つのタイプに区別できる。

A「共通コンテンツ中心の講義・演習とは別に、教員の専門性に基づく独自のテーマの講義・実習・共通コンテンツの趣旨に沿った演習等を実施した形式」のクラス（中村ゼミ、宮下ゼミ、峠ゼミ、大西・越田ゼミ）

B「全時間内に適宜、全学共通コンテンツの内容を紹介・実施」したクラス（久富ゼミ、西屋ゼミ）

なお、2014年4月2日に医学部の大学入門ゼミ担当教員による、「大学入門ゼミの進め方に対する意見・情報交換」を行った。打ち合わせの結果、本年度は学部共通コンテンツの作成・実施は行なわなかった。

・上記の内容についての実施形態

全学共通コンテンツに関しては、それぞれの教員の判断によりシラバスに従い実施した。ハンドブックおよび提供されたパワーポイントを参考に、学生参加型（学生によるプレゼン、実技、グループワーク等）のゼミが行われた。教員により、「全学共通コンテンツ」に関連する内容の動画の視聴、科学論文の引用文献の書式、文献検索の方法の解説を取り入れている。

また、授業の予習用動画のインターネット視聴による反転授業や、医学部図書館員職員による蔵書検索システム等の医学部図書館の使い方の紹介を行ったクラスや、共通コンテンツの発展形として、医療面接、コミュニケーション・アサーション・ファシリテーションスキルについての演習を行ったクラスもあった。

・全学共通コンテンツの部分の評価方法について

それぞれのゼミでシラバスに従い、教員の判断により成績評価の評価を行った。

・共通コンテンツ以外の部分の実施状況

クラスごとに教員の専門性に即し、独自の下記のテーマで講義を行った。

「現代の脳神経科学」（中村ゼミ）

「これからの君たちの将来を考えていこう」（西屋ゼミ）

「医療分野での X 線と放射線」（久富ゼミ）

「生物多様性と実験医学」（宮下ゼミ）

「患者から学ぶこと」（峠ゼミ）

「対人援助職に求められるスキル」（大西・越田ゼミ）

（2）受講生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

「プレゼンテーションの方法」、「レポートの書き方」および「日本語技法」の「メールの書き方」に関して、学生の評価が高かった。

「プレゼンテーションの方法」では、パワーポイントを実際に使って発表（プレゼン）を体験できた点、コミュニケーションの取り方についてもスキル演習や医療面接演習等で学べた点が評価されている。「レポートの書き方」については、具体的な書き方・注意点・参考文献のつけ方を学べた点に関して評価が良かった。

「メールの書き方」以外の「日本語技法」および「文献検索」以外の「情報整理の方法」の範囲が広く、具体的に役立つスキルが明確でないとの意見が多かった。

「レポートの書き方」については、具体的な課題によるレポート提出・添削指導がないと実際にスキル取得が難しいとの意見が学生より出ている。

（3）改善すべき点（担当教員からのコメント）等

- ・共通コンテンツに関してはこの分野の専門性の高い教員に担当してもらったほうがよい。
- ・医学科・看護学科を混在させてグループワーク等を行うことにより、コンテンツの実施内容によっては、学力差・スキルの差に応じた対応等に注意を払う必要がある。特に医学科には他大学既卒・社会人経験者もいるので、講義・演習に対するモチベーションの差、グループ学習における責任感の差があるのが要因となっている。

- ・医学部学生としての共通認識・対話の機会が持てたことに対する意義もある。

3-6. 工学部

表3 知能機械システム工学科の実施例

4/9	3303室	学科単位	ガイダンス
4/16	3303室	学科単位	情報整理の方法
4/23	3303室	学科単位	レポートの書き方
4/30	3301室	工学部全体	香川県警察高松南警察署警備課警部補 山口崇氏「自らの身は自らで守れる体制作り」 香川県警察高松南警察署生活安全課巡査部長 南原由実氏「薬物乱用とその危険性」
5/14	3301室	工学部全体	香川大学学術室情報図書グループ（工学部分館）チーフ 櫛橋一雅氏 「図書館を上手に活用しよう」
5/21	3301室	工学部全体	香川大学保健管理センター講師 杉岡正典氏 「キャンパスライフ入門」
5/28	3303室	学科単位	日本語技法
6/4	3303室	学科単位	プレゼンテーションの方法
6/11	6503室、6501室、 3303室	学科単位	個別面談
6/18	1号館4階	学科単位	グループワーク演習
6/25	1号館4階	学科単位	グループワーク演習
7/2	1号館4階	学科単位	グループワーク演習
7/9	1号館4階	学科単位	グループワーク演習
7/16	3303室	学科単位	プレゼンテーション評価
7/23	CA居室	学科単位	レポート・質問受付等

(1) 実施の概要

1年生CAが授業担当を受け持つという形式にて開講した。このため、学部全体としてCA数分の13クラスが開講された。また、学部共通で実施する週と各学科単位で実施する週を設け対応した。

例えば、下記は知能機械システム工学科の例である。「工学部全体」となっている週（3回）は学部の1年生全員が収容できる大教室でまとめ実施した学部共通コンテンツである。なお、各学科の詳細については、学科別特筆事項を参照願いたい。全学共通コンテンツは、学科単位で運用しており、講義形式で行うか、グループワークを通して行うか、各学科に任されている。

評価については、レポートとプレゼンテーションによっている。

以下、各学科別の特記事項である。

A 安全システム建設工学科

担当順序は機械的に割り当てた。グループディスカッションについては、担当教員の判断により、教員から与えられたテーマについて考察・検討するクラスと学生と教員で決めたテーマについてディベートをするクラスがあった。グループ学習の成績評価については、担当者間で全学共通コンテンツとグループ学習の配点比を定めたほか、評価方法について事前に情報を共有した。

B 電子・情報工学科

担当者間の連絡会議を開催し、事前のスキルアップ講座の出席状況を参考に各教員の担当講義を決定するとともに、グループディスカッションの進め方、評価の方法等について意識合わせをした。毎回、ミニレポート（A5サイズ）に感想などを書かせ、これを評価に加えた。ラウンドロビンのテーマとして「香川大学のよいところ」、「高校生と大学生はどこが違う」、「これまでに受けてきた高校・大学の授業内容で最も印象に残ったもの」をグループワーク技法のテーマとし、最終的なグループディスカッションの課題は、家電やスマホアプリなどの提案とした。なお、CAと学生の個人面談に大学入門ゼミの一コマを割り当て、学生状況の把握に利用している。

C 知能機械システム工学科

講義の遂行にあたっては、CAが逐次、情報交換を行いながら、授業効果が上がるよう努めた。また、提供されているコンテンツを基に、工学部学生に必要な内容となるよう、加筆修正をおこなって利用した。グループワーク演習の週では、機械系学生に必要なと思われる「もの作り」を念頭に入れ、実際に、もの作りとその評価を実施した。ここでは、グループ毎に、設計、作成、プレゼンテーションを行った。テーマは、パスタを用いた圧力容器の作成を行い、その制作物の実験実証を行い、その有効性をプレゼンテーションした。

D 材料創造工学科

学科ごとに講義を実施した第1～3回および第7～15回の合計12回の授業に関しては、前半と後半の6回ずつに分け、3名のCAがローテーションで講義の主担当を務め、主担当以外のCAも可能な限り出席するように心がけた。前半では、初回の「ガイダンス」の後、残りの5回は共通コンテンツの授業モデルにしたがった「情報整理の方法」から「プレゼンテーションの方法」までの講義を行った。一方、後半6回では、毎回の授業を前半と後半に分け、授業前半では「情報整理の方法」から「プレゼンテーションの方法」までの内容を学科向けにアレンジした実践型の演習を、授業後半では「協同学習の技法」を参考に、CAごとの少人数（20名程度）クラスでのグループワークを実施した。15回すべてで、その日の題材に沿ったレポートを課し、それら評点の総計で成績評価を行った。

（2）改善すべき点等

各学科からの意見を纏めて記す。なお、安全システム建設工学科からの意見はない。

B 電子・情報工学科

- ・大学側から入手したコンテンツは文系向と思われ使いづらい面もあった。理系向けの工夫も必要。
- ・実験レポートも含めてレポート作成が苦手な学生が相当数いるので、作成方法についてのフォローアップが必要と感じる。1年生の最初にレポートの書き方をいきなり教えられても、経験がない学生が大半であり、実感として伝わりにくいのではと思われる。何度か経験をしていく過程で教えるのがよさそう。

C 知能機械システム工学科

- ・大教センター作成のスライドの中には、工学系よりは文系よりの記述が多いため、各学部併せた資料があると有意義になると思います。

D 材料創造工学科

- ・大学入門ゼミ担当教員へのアンケートと本報告書との間で、調査が重複していますので、その調査内容を本報告書に集約するなどして「教員へのアンケート」を省略し、効率化を図ってはいかががでしょ

うか。

- ・レポートの書き方の題材として、グラフ（読み方、解釈、表現）を取り上げてはいかがでしょうか。数学（算数）というより読解力、日本語力の訓練となりますが、これらが乏しければレポートになりません。初めに観察目的を与え、写真を題材にしてもよいかと思われます。
- ・卒研においてプレゼンテーションがうまくできない要因として、日本語力の他、論理的構成力が著しく低いことが挙げられます。構成力がなければ、表面的なプレゼンの技術を学んでも役に立ちません。構成力を重視したライティングの訓練を取り上げることはできないでしょうか。
- ・一部の学生にとっては、本講義内容について、大学入学までに習得していると認識しており、本講義の必要性を感じていないと思いました。したがって、そうした学生と教員間で意識の違いを痛感しました（本件は、学生からのアンケート結果からも伺えます）。そこで、始めから講義をするといった詰め込み型な教育ではなく、実習（体験）に重きを置き、これまで当たり前だと捉えていた点（ノートやレポートの書き方、日本語技法など）を改めて見つめ直してもらうような講義にしてはどうでしょうか。
- ・もし次回担当する機会があれば、簡単な間違い探し（例題）を複数用意し、そこから学生自身にしっかりと考えさせる時間（ゆとり）を持たせていければと思います。例えば、学生に良いノート例を考え、実際に作ってもらう。簡単な題材を与え、レポートを実際に作成してもらう（可能であれば、教員が添削する）などが考えられます
- ・時間的に厳しいところもありますが、パワーポイントやそこに用いる資料データなど情報交換をもっと活発化すれば、工学部内での本授業内容がさらに良くなるのではないのでしょうか。

3-7. 農学部

(1) 実施の概要

・共通コンテンツの実施状況

昨年度までと同様に前半部分に集中し、後半部分は各講義独自の内容とした。合同では行わず、昨年度までの全学共通コンテンツの実施内容と問題点を踏まえ、各担当者が工夫を凝らしてクラス別に実施した。また、全学共通コンテンツの中では全てのクラスで図書館見学を取り入れ、司書の方に説明と案内をお願いした。

・学部共通コンテンツの実施状況

4月の講義1週目に1泊2日の合宿形式で屋島少年自然の家において実施した。大学入門ゼミの講義担当者ではなく、1年生のアドバイザー教員が担当し、TAのサポートを得つつグループワーク（テーマを決めて議論、大学生活についてTAとの質疑応答など）を行った。

・担当者間の連携の仕方

農学部では25年度から講義担当者2年任期で交代することとなったが、1名（末吉）が引き続き大学入門ゼミを受け持つこととなり、3月に事前打ち合わせを行って、前年度までの問題点や改善点などの情報を共有した。

・共通コンテンツの部分の評価方法について

共通コンテンツ部分だけを独立して評価することはせず、共通コンテンツで教えた内容が以後の学生達によるプレゼンテーションやレポートに反映されているかどうかを評価した。

・ 共通コンテンツ以外の部分の実施状況

概ね 7 回程度を各講義題目に沿った形で学生が選んだテーマに関するプレゼンテーションに充て、活発な討論を促した。教員は、学生達の発表・討論がスムーズに進むよう、座長のような役割を果たした。

(2) 受講生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

情報整理の方法は必要ないという意見が例年通り多かった一方で、「STAP 関連の事例はこれらのスキルが時と共に身につくものではないということを表している。」という意見も見られた。また、「レポートの書き方の内容は文系向けだったので、せめて理系と文系に分けてやると良かったと思う」、「情報整理の方法を削り、プレゼン技法、レポートの書き方を増やして欲しい」などの意見がある。理系の場合は講義担当者自身が理系の実態に即した形でアレンジし直す必要があると感じられた。

4. 来年度実施に向けて

以上の報告を踏まえて、実施部会で議論が行われた。議題となったのは、共通コンテンツ、研究倫理教育の強化、全学共通教育スタンダードの周知、の三点であった。

毎年のことではあるが、受講生アンケートでは、「情報整理の方法」、「日本語技法」の必要性に疑問を呈する意見が見られる。一方で、この二つの項目について、より詳しい指導を求める意見もあった。基本的な部分のみに焦点を合わせると不要なものに見えかねず、より踏み込んだ内容を扱おうとすると時間が足りなくなるという、これらのコンテンツの性格が、アンケートから読み取れるのではないだろうか。また例年通り、教員アンケートでは『大学入門ゼミハンドブック』についての注文もあったが、実施部会では、①ハンドブックが提示するのはあくまでもモデルであること、②ハンドブックは、最も基本的な内容を扱うモデルを提供すること、を踏まえて、改訂の必要はないというところで合意が得られた。また報告書のなかでも触れられているが、その他では、理系のための共通コンテンツモデルの必要性についても議論があった。これについては、大教センターでモデルを作成するのではなく、各学部で自主的に作成された場合に、その情報を全体でシェアしていく、という方向性が確認された。

次に、研究倫理教育の強化について議論がなされたが、これは大学入門ゼミの実践からというより、教育戦略室の要請を受けてのことである。教育戦略室は、主題 A、情報リテラシー、大学入門ゼミにおける倫理教育の強化を求めている。大学入門ゼミでは、特に研究倫理（剽窃の問題等）が所掌事項となる。大教センターでは、大学連携 e-Learning 教育支援センター四国の村井教授の協力を得て、知的財産権の観点から、研究倫理に関する指導モデルを作成することとなった。実施部会では、村井教授が作成したコンテンツについて意見交換が行われ、これをうけて村井教授がコンテンツを洗練させることとなった。来年度から、『大学入門ゼミハンドブック』にこの指導モデルを掲載すること、授業評価アンケートに「この授業では、ルールに従って学習を進めるための知識・態度を身につけることができる」という項目を追加することで合意がなされた。

最後に、全学共通教育スタンダードの周知について、高橋委員から提案があり、これが承認された。

昨年度に実施された調査から、学生のほとんどが、全学共通教育スタンダードについて知らない、ということが分かっている（斉藤ほか、2014）。これを受けて、初年次前期の必修科目である大学入門ゼミで、全学共通教育スタンダードについて周知してはどうか、という提案がなされたわけである。入学時ガイダンスでもスタンダードについては情報提供が行われているが、授業開始前であり、インパクトに乏しいようである。大学入門ゼミの授業の中で、スタンダードと各科目群の対応関係を明示することを担当者に要請することによって、学生への徹底した周知のみならず、教員にもスタンダードの理解を深めてもらうことが期待できる。

このほか、調査研究部で現在検討されているリーディングリスト計画に、大学入門ゼミ実施部会も参与することとなった。学部ごとに、新入生に読んでもらいたい本を、5～20冊挙げてもらい、まとめてリストアップする。大学入門ゼミでは、特にアウトプットに重点を置いたコンテンツ作りがなされてきたが、これによって、インプットの促しの一部が補われることになる。

5. おわりに

昨年度の報告の末尾にも書いたように、大学入門ゼミは安定的運用の段階に入ったといえる。今年度は、上述のように、受講生アンケートが簡略化され、実施部会の業務もルーティンワーク化してきた感がある。とはいえ、これまでの実施部会の議論の中で挙げられていた課題が、すべて解決されたわけではない。特に、大学入門ゼミと他の全学共通科目との関連付け、という課題は、ほぼ放置されたままだといってよい。科目運用の安定化が、「問題の見て見ぬふり」の常態化を招くのは望ましくない。香川大学では、平成28年度に全学共通教育新カリキュラムの導入が計画されている。新カリキュラムの導入は、各科目群間の関連付けについて検討をする絶好の機会であろう。全学共通教育の体系化は、実施部会の所掌を超える大きな課題であるが、現場に最も近い場所にいる者たちだからこそ出せる意見もあるはずである。来年度、大学入門ゼミ実施部会でもこの点を睨んだ議論を行い、適宜カリキュラム改革の検討WGに対して問題提起を行うことが、授業実践に即した全学共通教育の体系化につながると考えられる。

参考文献

- 佐藤慶太（2011）「「教養ゼミナール」から「大学入門ゼミ」へ」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第8号、27-39頁。
- 佐藤慶太ほか（2012）「「大学入門ゼミ」本格実施に向けて」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第9号、39-58頁。
- 佐藤慶太ほか（2013）「「大学入門ゼミ」本格実施をむかえて」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第10号、101-119頁。
- 佐藤慶太ほか（2014）「「大学入門ゼミ」実施2年目を終えて」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第11号、63-82頁。
- 斉藤和也ほか（2014）「学問基礎科目相関図の効果検証」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第12号、19-25頁。